

カナダ
「Canada」
作品No. 016-1



原画:千總
製作:木村染匠

IMAGINE ONE WORLD
KIMONO
PROJECT



～世界は違っても、ひとつになれる～
"The World Can Unite As One"

一般社団法人イマジン・ワンワールド
住所:久留米市中央町31-9(蝶屋株式会社内)
電話:0942-34-4711
FAX:0942-35-7514
Mail:info@piow.jp





■L・M・モンゴメリの世界

カナダ出身の作家、ルーシー・モード・モンゴメリが1908年に発行した「赤毛のアン」(原題 Anne of Green Gables)は世界中で愛されている名著で、日本でも村岡花子が紹介して以来多くの子供たちに読まれている不朽の名作である。プリンスエドワード島で育ったモンゴメリ自身の少女時代も作品に投影されていることから、カナダのKIMONOの主題は「赤毛のアン」の舞台～プリンスエドワード島とした。



■千總の若き女性の才能

創業460年の歴史と伝統を誇る京都の老舗「千總」が今回のデザインの担当に抜擢したのは、図案部の若き女性。まさに赤毛のアンの世界を描くのに最適の人選となった。彼女はプリンスエドワード島に咲く花々に注目し、その花をリース状に大きく取ることで、可憐なイメージを表現した。

そこに描かれたのは、野ばら(ワイルドローズ)・ライラック・ルピナス・シロツメクサ・紫爪草・ニワトコ・リンゴ・ワイルドベリー・キンポウゲの9種類の四季の花。雄大な自然とは対照的な、野に咲く花を主題とすることで、カナダをぐっと近くに感じ取れる、そんなデザインが完成した。

■日本の伝統文様との融合

花のリースの中に描く意匠には、伝統文様を誇る千總が得意とする「慶長取り」を取り入れた。燃えるように紅葉するメープルの森が湖に映る様子や、ロッキーマウンテンの山々などを「一珍染」という高度な友禅技法を用いて絵画のように描いた。

このようなデザインによって、プリンスエドワード島の花のリース越しにカナダの雄大な自然を観るというコンセプトと、カナダの文学や自然と日本の伝統的な文様を融合する目論見が見事に達成された。





■現代的でグラフィカルな文様と四つ葉のクローバー

カナダといえば、世界的にも「メープル」のイメージが強い。そこでリースの外側には、国旗にも描かれている「サトウカエデ」を取り入れた。さらにリースやその中のデザインと共立させる工夫としてあえてグラフィカルにサトウカエデを描くことで、モダンな感覚を作品に取り入れた。そして花のリースには、作者の強い想いで一つだけ「四つ葉のクローバー」が描かれている。KIMONOプロジェクトの理念である「世界の平和」を願う気持ちを作者が込めてくれたものであり、女性ならではの繊細な配慮に感心する。



■先住民のデザインとカナダをイメージした彩色

カナダ国旗は赤と白で描かれているため、KIMONOもそのナショナルカラーは大切に取り入れている。特に地色の白とメープルリーフの赤は、見た時に目に飛び込んでくる。そしてプリンスエドワード島の花々が、四季折々の美しい彩を添えている。また、全体の各所に描かれている小さな小紋文様は、ファースト・ネーションズ(北米インディアン)、メティス(先住民とヨーロッパ人の両方を祖先とする人々)、イヌイット(北極地方の人々)など先住民の残した織物や彫刻などから取材し散りばめた。ここにも、先住民と開拓民が共存するカナダ社会への敬意を表している。



カナダ「Canada」(作品No.016-2)

製作者 人間国宝 小川規三郎

技法 博多手織献上

■博多織の人間国宝として

カナダの帯の製作は、日本を代表する工芸家であり、博多織の人間国宝、小川規三郎先生が引き受けてくださった。小川先生は、プロジェクトに心から賛同されるとともに、ひとつだけ大きなこだわりを示された。それが「博多献上」を用いた挑戦、である。

博多織デベロップメントスクールの学長を務める小川先生にとって、伝統の献上柄は博多織の命でありプライド。言い換えるなら博多織の直球勝負に挑むことになった。

■カナダの四季の彩を経糸に込める

博多織の特徴は経糸の動きによる織であり、その点、デザインや組織には制約が多くなる。また、献上文様は、独鈷と華皿(共に仏具)と子持ち縞をあしらった模様の特徴である。

その博多献上に、カナダの四季の自然を織り込む。この難題に対して、小川先生が出した答え、それが、経糸によるボカシ。10の州と3つの準州からなるカナダを13の細かい縞模様で表している。

■江戸時代から続く秘技「糸綜紉(そうこう)」

博多織は、経糸のテンション(張力)が織の仕上がりを決める大切な要素。また、経糸を上げ下げする正確さ、静電気による糸のつまりを防ぐことが命題である。

そこで小川先生は、江戸で時代から続き、現在ではほとんど行わない「糸綜紉」をこの作品に用いた。糸綜紉とは、経糸を上げ下げする装置を糸で行う技術。現在は金属製の器具を使うことが常識である。その綜紉を6枚付くために、毎晩徹夜で弟子と共に二人で一枚ずつ、1週間寝ずの作業で綜紉を作り上げた。博多織の神髄を作品に極めようとする執念の準備だった。

■両面にそれぞれの個性を持たせた「カナダ献上」

従来、博多織は名古屋帯がほとんどで、袋帯の製作自体が異例である。そのうえ、今回はカナダの四季を表した表扱いの「カナダ献上文」と裏地にも同様の献上柄で、13州の子持ち縞を製作。表面的に見える表の部分だけではなく、締めると見えない裏地にまでカナダに対する敬意をこめて手織してくださった。

このような作品に対するこだわりこそ親子二代にわたり博多織をリードしてきた小川家の伝統。「職人は難しいことが好きなんですよ」そう言って、カナダの帯の製作を快く引き受けてくださった小川先生の充実した笑顔が作品から醸し出されるようだ。



イマジン・ワンワールドの作品に寄せて
(文責プロジェクトリーダー高倉慶応)

